

## 科技创新・城市发展 (イノベーションと都市の発展)

小 松 原 尚

この資料は、2014年11月22日（土曜日）に、上海師範大学外賓楼101会議室にて開催された、「科学技術革新と都市の発展」をテーマとする2014年度上海師範大学旅遊学院、城市发展研究院、中日人文地理・観光研究所主催による国際セミナーにおける講演（「沿岸域開発のイノベーションと都市の変容」）において使用したものである。内容は、奈良県立大学における地域志向教育のために作成したスライド教材をもとにしている。本文中に色を指す記述があるのは、原図がカラーであり、それを説明しているからである。

地域志向教育とは、日常の講義、すなわち座学で学んだことを大学の外で学生自らが実際に確認する教育である。同時に、学生が訪れた地域において、その活動がそこで生活する人々にとっても、暮らしつつけるための刺激となるものである。本学の学生は大阪方面からの通学者が多くこのため、奈良県との関連から大阪湾岸も取り上げる必要がある。

近年、中国語を使用する国や地域から、本学で学ぼうとする学生・生徒も増加している。その際に教育効果を高めるためには、中国語による教材の開発が不可欠である。その一つの試みがこの資料なのである。上記セミナーにおいては、この資料の中国語本文と画像を主体としたスライドを使用した。上海師範大学の学生も多数出席しており、彼らの反応が確かめられた。結果は良好であった。

中国語本文の作成には、京都大学工学部地球工学科二回生の張 錚さんの協力を得た。さらに、上海師範大学教授・王承云先生には、講演素材の閲読を賜った。記して感謝申し上げる。

研究資料

1、正如大家所知道的，河流的出海口能够形成冲积平原，而地处海陆交界之处的城市被称为沿海城市，日本的大城市也多位于此。就以大阪为例，大阪就是利用扩大的陆地面积从而得到进一步的发展和改造的典型城市。在17世纪初期以前，大阪的陆地面积一直都比较狭窄，像现在的USJ大型游乐场、水族馆等休闲游乐场所以以及一些工厂所在地在当时其实都还是海底，这条蓝色的线表示的就是1704年的海岸线。此处顺带一提，大阪的名字是到19世纪中期才有的，在这之前其实叫做大坂。



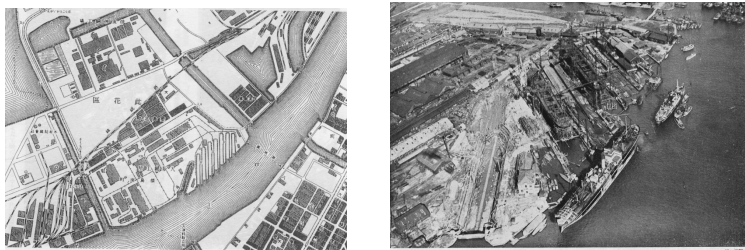
2、从17世纪后半叶开始，大阪的陆地面积开始逐渐扩大，这时的海岸线用黄线表示。通过观察18世纪与19世纪大阪的海岸线，此处海岸线分别用绿线和蓝线表示，可以发现从17世纪后半叶开始扩大的陆地面积一目了然。在当时，人们在浅海区域趁退潮之际设置堤防，这些地方因此而得到了陆地化，从而能够进行开垦来增加大米产量，这就是当时的开垦事业，也是堤防建设和革新时期。



3、从19世纪后半叶起，日本进入了工业生产的革新阶段。就以现在大阪市大正区南部为例，由于19世纪中期的开垦，水田的面积因此得到了增加，继而又在水田所在区域填土造地，在此之上再兴建制铁和造船的工厂，日本近代先进地区就这么出现了。

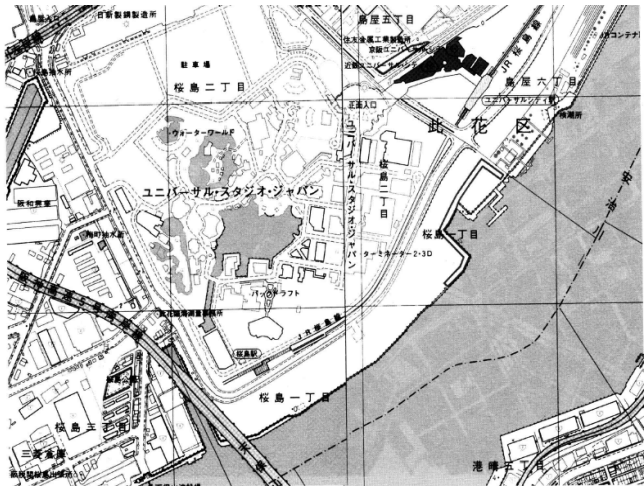


4、现在USJ大型游乐场所在的地方在大约30年前正是金属制造厂和造船工厂的所在地。请看，这些是1930年左右的地图和照片。当时这个区域是日本工业生产必不可少的地区之一。但是到了20世纪末期，由于中韩两国金属制造业和造船业的迅速发展及扩大，日本此类生产开始逐渐减少。



研究資料

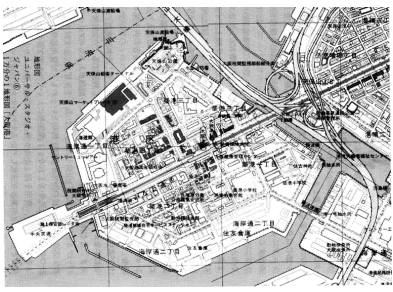
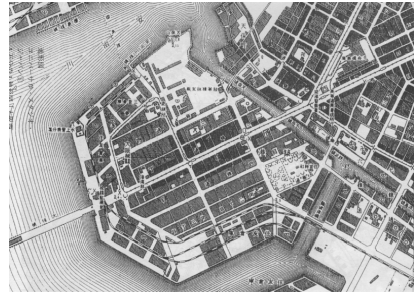
5、虽然日本的工业生产从那时起开始减少，但是取而代之的是服务业的发展。日本开始在原先工厂所在的位置建设大型主题游乐场来吸引游客，并通过门票的销售以及相关商品的贩卖来增加工业生产带来的收入。



6、大家请看这张照片，这是1930年左右大阪港口的样子，到处都能看到用来保管船只运送来的货物的仓库。如果比较当年的地图和现在的地图，就可以发现，当初做贸易的场所变成了现在的水族馆、购物中心等等休闲场所。这就是船舶运输方式的变革带来的港湾地区土地利用方式的变化。



昭和5年（1930年）の大阪港の様子。写真には、船舶の荷役や保管のための倉庫が数多く見られる。当時の大阪港は、貿易の中心地として栄えていた。写真の出典は、大阪府立中央図書館蔵の『大阪府史』である。



7、综上所述，由于日本大城市大多位于沿海地区，所以迄今为止，日本大城市的发展事实上就是沿海地区改革的产物。从17世纪到18世纪，日本通过工程技术的改革，使得浅海地区水田化。而19世纪后半叶到20世纪，产业改革又使得城市发展为工业生产的中心。20世纪至21世纪期间，在充分利用产业改革成果后，工厂设施减少，休闲设施增加，服务业得到了进一步发展。从17世纪起的一系列变革使得日本的大城市完成了从工业生产的中心到以服务 and 消费为主的功能转换。

## 文献

山本三生ほか編集『日本地理体系第七巻・近畿篇』改造社，1929

奥野一生著『新・日本のテーマパーク研究』竹林館，2008

## 【日本語の原文】

- 1) 日本の大都市は河川河口の平野にある。大阪を例に、日本の都市の発展を陸域の拡大とその土地利用の変化からみてみよう。尚、海域との境界線を形成する陸域を沿岸域という。大阪（19世紀半ばまでは大坂）では、17世紀の初めまでは、陸地は狭かった。現在、USJ、海遊館（大型の水族館）のようなレジャー施設や工場のある場所は、海底だった。青い線が1704年時点の海岸線である。
- 2) 大坂では17世紀後半（黄線）から徐々に陸地を増やしていった。18世紀（緑線）、19世紀（青線）とみていくと、徐々に陸域が広がったことがわかる。米の生産を増やすために浅い海底を海水が少ないときに堤防で囲んで陸地化した。これを干拓事業という。この背景には、この時期に堤防建設のイノベーションがあった。
- 3) 19世紀の後半から、日本は工業生産のイノベーションが活発になる。例えば、現在の大阪市大正区の南部をみると、19世紀中には干拓が進み、水田が増えた。その後、水田を埋め立て、そこに製鉄や造船の工場を建設し、日本の近代化の先進地域になった。
- 4) 現在、USJのある場所は、30年ほど前まで造船所や金属製造の工場地帯であった。地図と写真はさらに昔、1920～30年代のものである。この地

域は日本の工業生産にとって必要不可欠の地域の一つであった。その後、20世紀の終わりごろから鉄鋼や造船の生産は減少する。その理由は、中国や韓国が生産を拡大したからである。

- 5) そこで日本では、サービスの生産に関するイノベーションが活発化する。それまで工場のあった場所にテーマパークを建設し、多くのお客さんに来てもらい、入場料やそこで商品を販売することによって工業生産を上回る収入を得ようとしたのである。
- 6) 写真は1930年代の大阪港の様子である。船に積んで来た荷物を保管するための倉庫が建並んでいる。その年代の地図を、現在のもの（2000年）と比較すると、貿易のための土地利用から、水族館（海遊館）や商業施設など、レジャーや買物のための場所へと変わったことがわかる。船舶による輸送方法のイノベーションの結果、港湾地域の土地利用が変化したのだ。
- 7) これまでの話をまとめておこう。日本の大都市は沿岸域にあるので、現在までの日本の都市の発展は沿岸域での様々なイノベーションの成果である。17世紀から18世紀には、土木技術のイノベーションによって、水深の浅い海底を水田化していった。19世紀の後半から20世紀には、産業のイノベーションによって、都市は工業生産の中心地となった。20世紀から21世紀にかけては、工場は減少し、代ってレジャー施設がつくられた。それらはこれまでの産業のイノベーションの成果を活用している。そして、サービスの生産に関する面のイノベーションも進展した。その結果、日本の大都市は、工業生産の中心地から、サービスの生産と消費のそれへと変化した。